助ける

小　五

「うざい。」
「きもい。」
「バカ。」

この世の中には、人をきずつけるいろいろな言葉がある。しかし、みんながそれを知らず知らずのうちに使っている。だれもいじめとは思っていない。

わたしも、そんな経験を通して、二つの強い意志をもった。その経験をしたのは、わたしが四年生になってA君と同じクラスになった時だ。最初は、みんなきん張してあまり感情を言葉に出さなかった。しかし、一ヵ月くらいたつといろいろな人のいやな所を感じるようになり、自然と言葉にしていた。その中でも、A君は少しみんなに迷わくをかけたり、人が見たくないことをしたりしていた。だからかもしれない。みんながA君にいやなことを言った。わたしもそのうちの一人だった。

「気持ち悪い。」

それをいじめではない、それくらい平気、きずつかない、とばかり思っていた。だから、やめなかった。口にはしないけど聞いているだけの人も、聞いているだけで止めなかった。

ある日、クラスで差別・いじめ・ぼう力など、人がきずつく事につい

て話し合った。私はこの話合いで、今まで自分がどんなことをしたのかに気づいた。どうして気づかなかったのか、助けなかったのか。みんなにやめようと声をかけたり、A君に大じょうぶと、声をかけたりしていれば、A君がどれだけ救われたか。

「ごめんね。」

クラスの全員がA君に言ったのは、初めてだったかもしれない。みんなが初めてA君の気持ちを分かろうとしたしゅん間だった。

私が強い意志をもったのは、その時だった。一つ目は、相手の立場になって考えるということ。二つ目は、人の心をきずつける言葉を言わないということ。それは、私以外の人も気をつけなければいけない。そんなことは当たり前と思う時もある。でも、この思いを持てたのはA君、先生、そして、みんなのおかげだった。

これからもこの経験を生かし、強い意志を持ち続けたい。そして、A君と同じ思いをする人がいなくなるように、助けられる人になりたい。